

二十年前、フランスでスパイをしていた。

某財団法人のバリ事務所、フランスの郵政公社や郵電省の連中を食わせたり飲ませたりして、民営化の方針やら郵便事情やらを聞

窓のそとは、森

⑤トゥールーズの郵便列車



慶應義塾大学大学院
メディアデザイン研究科教授
中村 伊知哉

き出しては、東京に打電していた。よく会うアメリカの二人組がいた。彼らもフランスやEUの通信政策を探っていた。

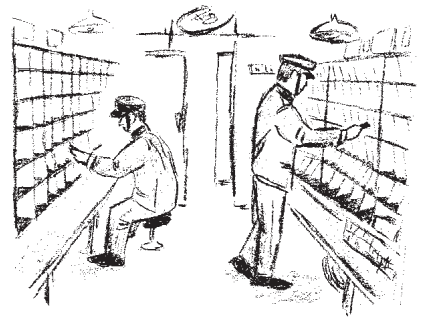
ある日、二人がスパイ罪で国外退去となったという記事がでか

かと新聞に載った。政府関係者に
対し、不当に飲み食いさせ、不正
に情報入手したのだという。私
は同じことをしていた。自分がス
パイであることをそのとき知った。
フランス内務省に、私はどうな
ると聞いてみた。「日本はいん
だよ」と言われた。がっかりした
だつてスパイ罪で帰国させられた
ら、カッコいいじゃないですか。

日本からの客も多かった。某地
区の特定期郵便局ご一行様がいらし
た。もうすぐ定年のおじさんたち
十数名。フランスの地方に連れて
けというので、トゥールーズとい
う街に行つた。

特に目的はない。その郵便局
の連中と軽く社交をした。退役軍
人やら婦人会やらも来た。フラン
ス語もよく通じないし、民営化が
どうしたとかいう話も面倒だし、
さほど盛り上がりせず終わった。

その帰り、国鉄の駅に寄つた。
たまたま郵便列車が停まっていた。
フランスの郵便局員たちが「丁度
いい、見せてあげる」という。珍



しいだろう、という態度だ。

おじさんたちと入った。仕分け
の台が左右に備わっていた。とた
ん、目つきが変わつた。「同じだ
ね」。前の卓上には手紙や葉書の
束。三人のおじさんがスツと束を
手にした。棚のハコについている
番号と、郵便物を交互に見つめた。
「いっちょ、やるか。」と言うや
いなや、棚のハコに、一つ一つ、
放り込み始めた。私は、マズい、
フランス語も読めないのに勝手な
ことをして、と思つた。だが隣に
いたフランスの局員は「アア」と
歓喜の声をあげた。やつてるこ

とが、全く正しい、という。

しかも、おじさんたちのスピー
ドはみるみる上がり、機関銃のよ
うに仕分けを始めた！他のおじさ
んも参加した！ニッポンの郵便局
員の腕みせたるでえ。「ブラボー！」
気がつけばフランス局員もみんな
参加して、狭い車内にすし詰め
で日仏仕分け合戦となつている！

郵便の世界、人と人をつなぐ仕
事は、洋の東西を問わない。それ
を担うおじさんたちの心意気も同
じようだ。一瞬で通じ合う。うら
やましい。いいものを、見せてい
ただいた。

本件は、東京に打電しなかつた。

プロフィール 一九八四年郵政省入省。
橋本行革で省庁再編に携わつたのを
最後に退官し渡米。一九九八年 M
IT メディアラボ客員教授。二〇〇
二年スタンフォード日本センター
研究所長。二〇〇六年より慶應義塾
大学教授。社団法人融合研究所所長
などを兼務。著書に『コンテンツと
国家戦略』（角川THINK選書）など多数。